

石 匙

—— 西北九州における縄文時代の石器研究三 ——

橘 昌 信

はじめに

これまで二回にわたり、西北九州における縄文時代の石器研究として、「縦長剝片」¹および「石銛」²について若干の論巧を行なった。黒曜石製の縦長剝片は縄文時代の中・後期を主体に、西北九州の地域で集中的に認められるものであり、石銛は前期～後期にかけて顕著で、地域的には西北九州の海岸部を中心に認められ、対馬暖流に関連する外洋性の漁撈具としての位置づけを試みた。両者とも、縄文時代における西北九州の地域性を示唆する石器として把握できたのである。

一方、今回の石匙については、日本全土の縄文時代遺跡の大半で、しかも縄文時代の早期～晩期の長い期間に認められる極めて普遍的な石器として把握されているのである。この様な石匙が、西北九州の縄文時代においてはどのような現状かについて、時期・形態、その用途などについて二・三の考察を加えてみたい。

なお、ここで言う西北九州とは、佐賀・長崎の両県と福岡の北部、それに熊本の北の一部を含む地域を便宜上想定している。

石匙の名称

石匙は「石匕」という名称でも呼ばれている。これは江戸時代の国学者木内石亭の「雲根誌」の中で『天狗飯匕』あるいは『狐の飯匕』として記載されているものによるのであろう。石匙の特徴的な形態から、地方の民間説話と結びついたものと考えられており、石器の形が考古学の遺物の名称として用いられている好例とされる。また明治時代には「皮剝（具）」という名も見えるようであるが、この方は土俗例からこの石器の使用法、対象物を想定した上での名称とされよう。『石匙』という名称は、やはり明治時代の中頃からあらわれるものであり、これらの呼称については中谷治宇二郎の「石匙に対する二三の考察」³の中で触れられている。

この小論で取り扱う石匙は素材の剝片に刃部としての加工を施し、さらに、石器の一部の両端に小さなノッチ状の加工を行なうことによって「つまみ」を形成しているものである。つまみがついていることから特に「有柄石匕」、タンゲド・スクレイパー (Tanged-Scraper) とも呼ばれる石器である。

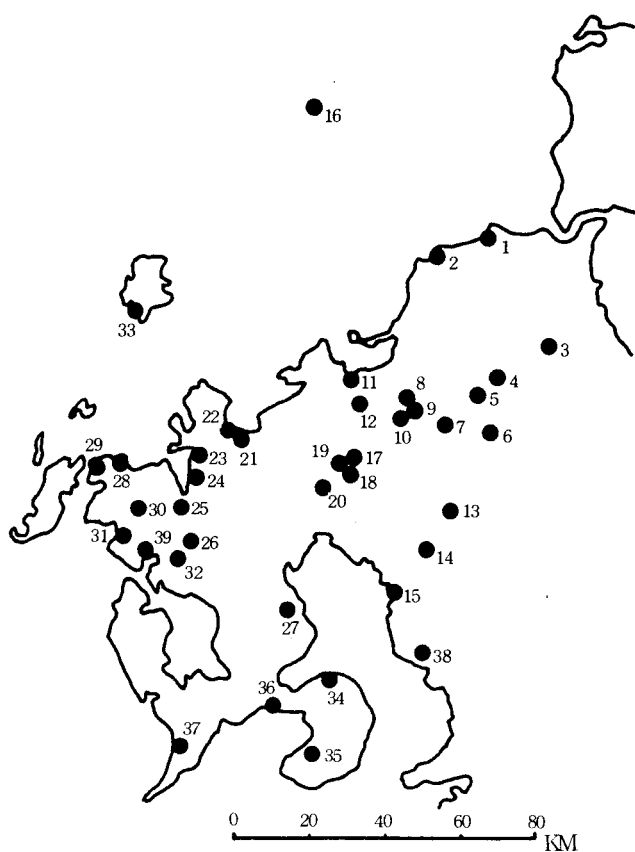
石匙はつまみと刃部との位置によって「縦型」と「横型」とに大別されている。すなわち縦型はつまみと並行する位置に刃部がみられるのに対し、横型はつまみと刃部が直交するものである。石匙の用途についてはその形態および土俗例などから、樹木の皮剥ぎ、動物などの解体処理、それに木製品・骨製品などの製作が想定されている。石匙のつまみについてはそのくびれ部に膠着剤の痕跡が観察されるものの存在から柄との着装も考えられるが、一般的には紐で吊すためと判断されている。⁴

以下、西北九州において石匙が出上している代表的な遺跡を挙げながら石匙の時期、形態、用途などについてみることにする。

石匙出土の遺跡

西北九州において石匙が出土している縄文時代の遺跡数はかなりの数にのぼる。しかし、石匙のみが単独で採集されたり、あるいは他の時代の遺跡において混在した状態で出土しているため、その時期や他の遺物との関連が追求できる資料は意外と少ない。発掘調査などによってほぼ明確に把握できる遺跡は四〇ヶ所前後しか数えることができない（表一）。西北九州の縄文時代遺跡の概数は一七〇であり、それに比較すると石匙出土遺跡の数は少なく、必ずしも普遍的なものとは言えない状況もある。しかも一遺跡における数も、佐賀県大門遺跡⁶、福岡県深原遺跡⁷でそれぞれ一三点出土しているのが最も多い例で、大半の遺跡では数点と少ない。発掘調査が実施された遺跡でも、石匙との共存関係を示す土器が明確に把握されない場合がある。これは石匙に限ったことではなく石器全般について言えることであるが。そこで、遺跡において出土した石匙に対しては複数の時期やあるいは一時期での時間的先後関係が示唆される数型式の土器との共存というような時間的な幅をもって、把握せざるを得ないケースが多い。この時間的な幅を考慮すると一遺跡のある限られた時期の石匙の数はさらに少ないことになる。多い例として先に挙げた大門遺跡は縄文時代の前・後期の土器が、深原遺跡では早期の二型式の土器が予想されるといふ状態である。

石鏃、石斧と共に縄文文化を象徴すると考えられている石匙については、遺跡数および遺跡におけるその量的なことも含めて改めて問題とすべきであろう。同時に石匙の機能、使用法、それに他の石器との関連についても究明される必要がある。たとえば、石匙が出土している遺跡、または石匙が見られない遺跡においても、比較的大形で厚味のある剝片に二次加工を施したスクレイパー（搔器・削器）がほとんど例外のないほど認められるので



第1図 西北九州における縄文時代の
石匙出土主要遺跡の分布

ある。この他、不定形な二次加工のある剝片や使用痕が観察される剝片などについても目を向けなければならぬであろう。これらの石器は石匙のように特別な形をしていないし、定形的な石器でもない。しかしながら時間的にも空間的にも普遍的な存在であることは石匙よりはるかに上である。いずれにしても縄文時代の石器について

はこれからの研究に待たなければならぬ問題が数多く存在していると言えよう。

石匙の時期

石匙の時期については、西北九州においても他の地域と同様、縄文時代の早期～晩期にかけての全時期を通じて認められるようである。しかしながらその初現をいつに、またどのように把握するか

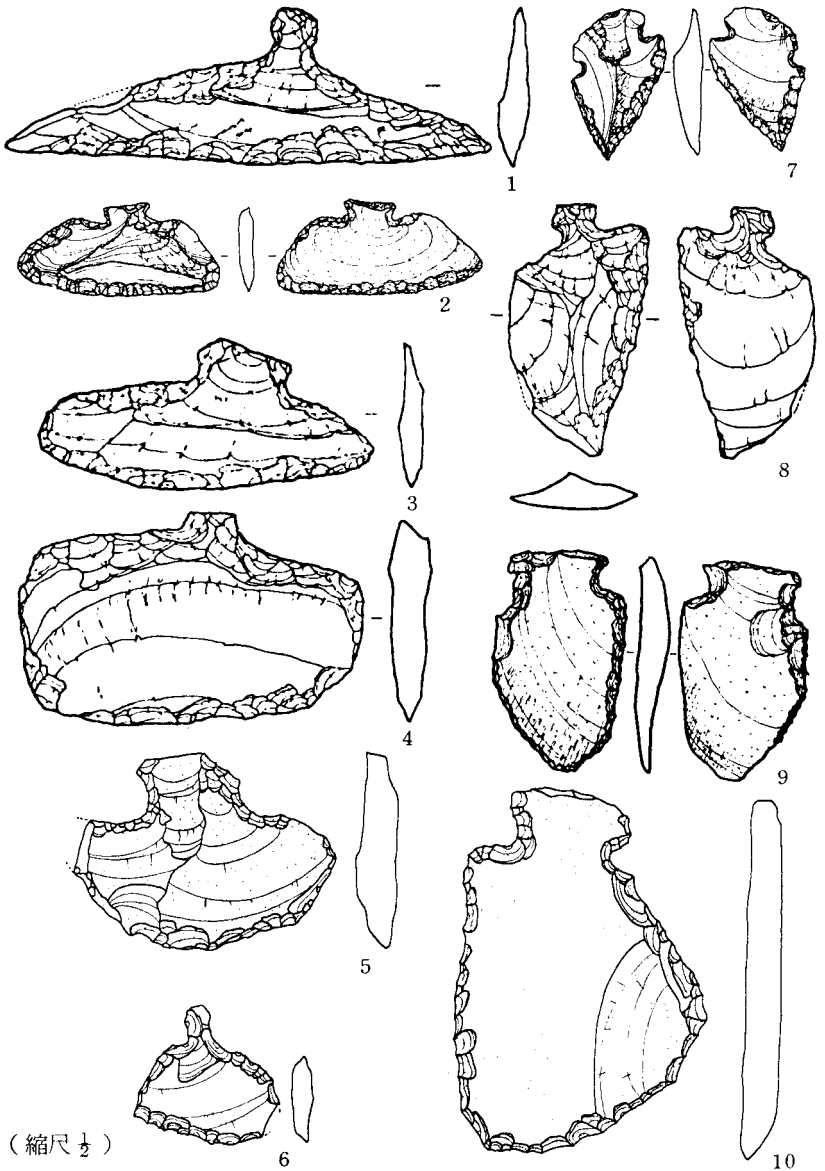
No.	遺跡名	時期	石		匙		石鏃	石斧	スクレパー	縦長剥片	石磨石	註
			横	縦	その他	不明						
1	山鹿貝塚	中	○	○			○	○	○	○	○	28
2	鐘崎	後	○				○	○	○	○		33
8	上野遺跡	後	○	○			○	○	○	○		38
4	北古賀	後	○	○			○	○	○	○	○	35
5	鳥バミ	前	○	○			○	○	○	○		21
6	金山	前	○	○			○	○		○	○	26
7	野黒坂	後	○	○			○	○	○	○		42
8	野門田	早	○	○			○	○	○	○	○	43
9	深原	前	○	○	○		○	○	○	○	○	7
10	柏田	後	○	○			○	○	○	○	○	37
11	湯納	前	○	○	○		○	○	○			66
12	四箇	中		○			○	○	○	○	○	34
13	白川	後	○				○	○				67
14	大道端	後	○	○			○	○	○	○	○	36
15	荒田比	中	○	○			○	○	○	○		68
16	沖ノ島	前	○	○			○	○	○		○	23
17	大門	前	○	○	○		○	○		○		6
18	権現原	後	○				○	○	○			70
19	大門西	後	○				○	○	○	○		32
20	竜王	前		○			○	○	○	○		18
21	柏崎大深田	後	○	○			○	○	○	○	○	41
22	唐津海底	前	○	○			○	○				19
23	金剛島	前	○	○			○	○				20
24	源平岩洞穴	前	○	○			○	○	○	○		69
25	白蛇山岩陰	中	○				○	○	○	○		30
26	坂ノ下	中	○				○	○	○	○	○	27
27	儀助平	早	○	○			○	○	○	○		71
28	姫神社	前	○	○			○	○	○	○	○	72
29	つぐめのはな	前	○				○	○	○	○	○	25
30	岩谷口岩陰	前	○	○			○	○	○	○		22
31	下本山岩陰	前	○	○			○	○	○	○	○	78
32	岩下洞穴	早	○	○	○		○	○	○	○	○	8
33	鎌崎海岸	前	○	○			○	○	○			49
34	筏	後	○	○			○	○	○	○	○	31
35	原山	後	○	○			○	○	○		○	40
36	有喜貝塚	中			○		○	○		○		29
37	深堀遺跡	後	○				○	○	○		○	39
38	古閑原貝塚	中	○				○	○	○			74
39	天神洞	後			○		○	○		○		75

表1 西北九州における縄文時代の石匙出土主要遺跡

は重要な問題であり、ただちに判断しがたい。

現在までのところ、縄文時代早期の長崎県岩下洞穴のⅣb層・Ⅴ層、それに深原遺跡⁹に求めることができようであるが、その類例は必ずしも多くない。岩下洞穴のⅣb層から二点、Ⅴ層から一点出土している。この両者の層からは尖底の押型文土器、無文土器と共に、少量であるが前期の轆式土器や曾畑式土器が含まれている。それに不明な土器として取扱われているものがかんりの数存在している。この様な状況からすれば、これらの文化層から出土している石匙の時期をただちに早期に、しかも尖底の押型文土器・無文土器に伴うものとの判断はできないであろう。ちなみに、ⅣbおよびⅤ層出土の押型文土器は九州における従来の押型文土器の型式にあてると「早水台式」に相当するものと考えられる。一方の深原遺跡は西北九州の地域においては稀にみる早期を主体とした大遺跡であり、三二個におよぶ多数の石組みの炉跡と豊富な遺物が出土している。当遺跡のⅢ層・Ⅳ層が押型文土器の文化層で、両者の明確な層位的区分はなされていないようであるが、Ⅲ層は「田村式」、Ⅳ層は「早水台式」にそれぞれあてることができよう。問題となる一三点の石匙はいずれもⅢ層から出土しており、一・二点は横型もので、残り一点は縦型である。これらに共伴する土器は田村式であり、この土器は九州の押型文土器群の中では比較的新しいグループに入ることから、縄文時代早期後葉と判断して大過ないであろう。¹⁰

結局、西北九州における石匙の初現は、早期後葉の押型文土器群に求めることができる。このことは、九州において押型文土器群の研究が比較的進んでいる東九州の現状からも傍証が可能である。すなわち、九州の押型文土器文化の代表的な遺跡として著名な大分県早水台遺跡の豊富な石器類の中に一点の石匙を見い出すことができる。¹¹ また早水台遺跡に若干先行する大分県稲荷山遺跡についても同様である。¹² さらに早期から前期に



(縮尺 $\frac{1}{2}$)

1・3・4・8…深原遺跡, 2・7・9…岩下洞穴, 5…深堀遺跡, 6…山鹿貝塚,
10…沖ノ島社務所前遺跡

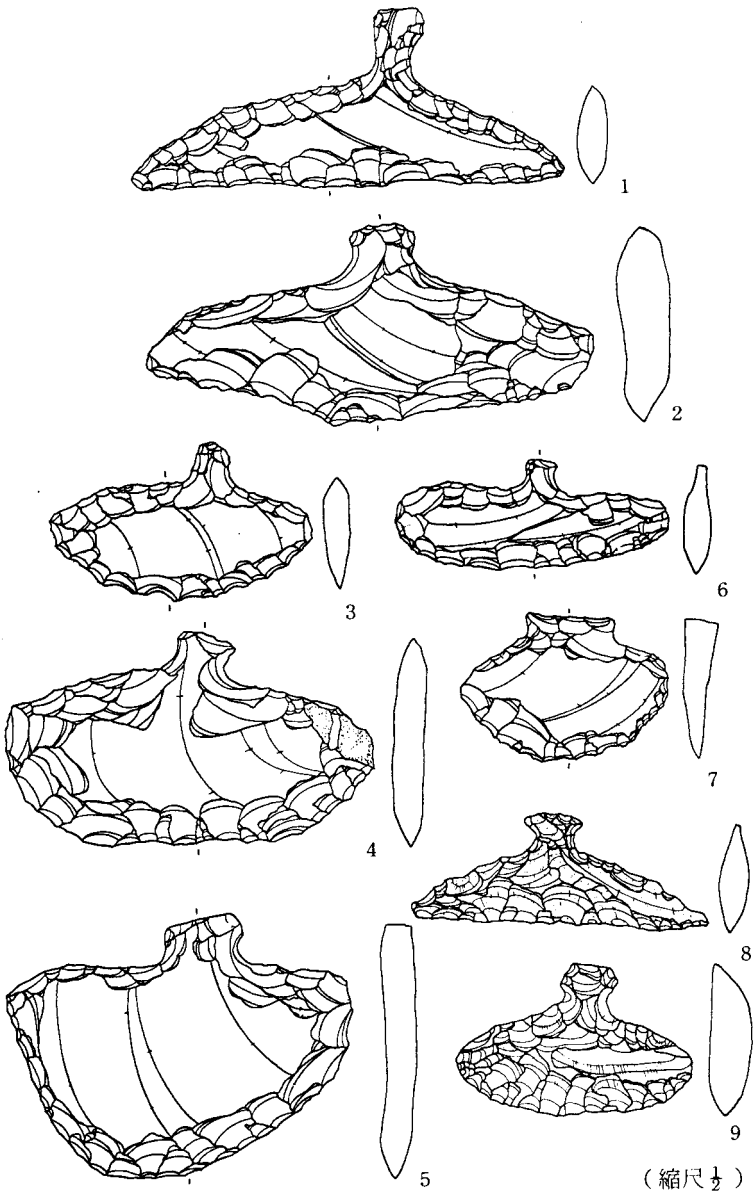
第2図 西北九州出土の石匙(1・7・8…Ⅰ類, 2・3・9…Ⅱ類, 4・5・6・10…Ⅲ類)

かけての洞穴遺跡である大分県川原田洞穴¹³においても、早期の無文土器群、押型文土器群との共伴事実は認められず、それらの上層に位置する塞ノ神式土器に横型の石匙が伴っている。なお、東九州では現在のところ押型文土器の一つのタイプサイトとされている田村遺跡¹⁴でも、また深原遺跡Ⅲ層の押型文土器とほぼ同じ時期が主体と考えられる大分県政所馬渡遺跡¹⁵出土の押型文土器群にも石匙をみることができない。これらのことを考慮する時、深原遺跡の石匙を初現とみなすことができる。

東九州では押型文土器群に先行する早期の中葉から前半にかけては無文土器群や条痕文土器群の存在が予想されるが、¹⁶西北九州についてはその時期が空白と言わざるを得ない状況である。細石刃・細石核との関連で研究が進められている隆起線文土器・爪形文土器・押しき文土器などに後行する土器群の実体が不明瞭であり、石匙との関連もまったく判明していない。

次の縄文時代前期になると石匙の出土遺跡は早期に比較してやや多くなるが、それでも明確に前期と認定できるものになるとやはりその数は少ない。佐賀県竜王遺跡¹⁸・唐津海底遺跡¹⁹・金剛島遺跡²⁰、福岡県鳥バミ遺跡²¹などを挙げることができる。やや明確さを欠くが長崎県岩谷口岩陰遺跡²²、福岡県沖ノ島社務所前遺跡²³もつけ加えることができる。この諸遺跡の主体となるのは、従来「曾畑式土器」と呼称されている前期の土器群であり、これに伴うものと判断される。しかもこれらの遺跡出土の石匙はいわゆる「縦型」をしたものが顕著であるという傾向が窺える。

同じ前期に位置づけられる「轟式土器」との明確な共伴関係を示す石匙については今のところ明瞭さに欠けているように思える。熊本県轟貝塚²⁴、長崎県つぐめのはな遺跡²⁵、福岡県金山遺跡²⁶などにおいては共伴の可能性が示



1~7...つぐめのはな遺跡, 8・9... 沖ノ島社務所前遺跡

第3図 西北九州出土の石匙(1・8...Ⅰ類, 2・3・9...Ⅱ類, 4~7...Ⅲ類)

峻されている。それらの石匙は曾畑式土器群にみられたような形態的特徴は抽出できそうもなく、ただ縄文時代中・後期のそれに比較して全般的に作りが複雑な様に見受けられる。いずれにしても轟式土器と共伴する石匙については今後に残された問題とされよう。

西北九州の縄文時代中期は「阿高式土器」ならびにその系統の土器群で代表されるであろうが、それらの土器群に伴う石匙の出土遺跡として、佐賀県坂ノ下遺跡²⁷、つぐめのはな遺跡、福岡県山鹿貝塚²⁸などが存在している。他に、長崎県有喜貝塚²⁹、佐賀県白蛇山岩陰遺跡³⁰もこの時期の石匙が出土していると判断されよう。石匙を出土している遺跡自体の数も少なく、また一遺跡における数も限られている。

後期の時期は、それ以前に比べてかなり明確な状態で把握することができるようである。西北九州の後期の主体を占る磨消縄文土器群に伴う石匙の出土遺跡では、長崎県筏遺跡³¹、佐賀県大門西遺跡³²、福岡県鐘崎貝塚・四箇遺跡³⁴・北古賀遺跡³⁵などが挙げられる。それに福岡県大道端遺跡³⁶・柏田遺跡³⁷・上野遺跡³⁸など、九州北部において顕著な様相が知られる。ここに挙げた諸遺跡は中期のそれと同様、黒曜石製の縦長剝片やそれを素材にした剝片鏃などを共伴する場合が多い。

最後に、石匙の終末についてはどの様な状況であろうか。西北九州の晩期の遺跡においてもやはり石匙を見ることが出来る。長崎県深堀遺跡³⁹・原山遺跡⁴⁰、佐賀県柏崎大深田遺跡⁴¹、福岡県野黒坂遺跡⁴²をその例として挙げることができ、後期との関係も無視されないであろうが、大道端遺跡・柏田遺跡もその可能性が含まれている。

一方、弥生時代における石匙の存在はいかなるものであろうか。弥生文化の打製の剝片石器の研究はあまりなされていないようであり、石匙についての検討も同様に行なわれていない。

弥生時代遺跡での石匙の出土例として、福岡県門田遺跡⁴⁵の3号および19号袋状竪穴、津古内畑遺跡のV字溝、北牟田遺跡⁴⁵の竪穴住居址などの遺構内から発見されているものが挙げられる。この遺構はいずれも弥生時代前期から中期中葉にかけての時期におさまっている。これらの石匙の時期について明確な判断を下すデータを持っていないわけであるが、その時期のあり方から弥生時代の所産として把握することが可能と思われる。この他、福岡県板付遺跡G-6 a地点⁴⁶や長崎県五島三井築貝塚⁴⁷においても石匙の出土が報告されている。特に弥生時代中期前半に相当する時期である三井築貝塚では、石匙の他、西北九州の本土においては縄文時代の中・後期に主体が置かれる黒曜石製の縦長剝片やそれを素材にした剝片鏃などを出土しており、石匙も含めて離島における石器のあり方は極めて興味深い。

以上の主要な遺跡における出土例から考え、縄文時代の全期間を通して、石匙が製作され使用されたこととなる。しかしながら概に述べたように遺跡の絶対数を問題とする時、やはり少ないと言えよう。弥生時代の石匙の存在については現在のところ不明と言わざるを得ないが、弥生時代の前期から中期の中葉頃までは残在する可能性はあるものと考えておきたい。

石匙の形態

石匙の形はきわめてバリエーションに富んでいることはよく知られているが、つまみと刃部の関係から「横型」と「縦型」とに区分され、それによる分類が一般的に用いられている。石匙のつまみについて後ほど触れることにして、まずこれまでの分類の基礎になっている横型と縦型をそのまま使いさらに刃部の形態から大別すること

を試みたい。

石匙の分類において、つまみの位置による横型・縦型の区別と同様に、あるいはそれ以上に重要な要素として、刃部に接する先端の形状が問題視されるべきであろう。すなわち、刃先きが鋭い三角形をしたもの、尖頭状をしたもの、それに大きな弧状あるいは直線的なもの、というように三つのタイプに大別される。

横型の石匙では直線的な刃部を有しその両端が鋭く尖るもの（Ⅰ類）、外彎を呈す刃部に交わる木葉形をした尖頭部を有するもの（Ⅱ類）、それに外彎する刃部に連なるゆるやかな孤状ないし直線的な側辺を形成するもの（Ⅲ類）が基本的なタイプと見なされる。

一方、つまみの延長上と同じ方向に刃部をもつ縦型の石匙も横型と同様、つまみの反対側の一端の形状によって三つに大別される。刃部の延長上のどちらか一端が鋭角な三角形をなすもの（Ⅰ類）、ほぼ中央に木葉状の尖頭部を有するもの（Ⅱ類）、Ⅰ・Ⅱ類の先端部が折れたようなほぼ直線をなすもの（Ⅲ類）である。

刃部およびそれに接する部分の形状の違いは石匙の機能に関連するものであり、実際の使用上での対象物やつかわれ方での差異が予想されるのである。特にⅠ類とⅢ類ではその用途の上で明かな違いが存在したと思われる。

以上のように、横型・縦型を基礎におき、それに刃部の形態上の違いからそれぞれ三類に分類したわけであるが、各タイプの時期による消長や一遺跡におけるあり方などについてを明瞭にするまでには到っていない。ただ全般的な傾向として、従来から言われているようにやはり横型の石匙が西北九州でも卓越していると言え、しかも横型のⅡ類が顕著である。縦型の石匙も各時期を通じて散見できるが、縄文時代前期に比較的多いという傾向

が看取される。それに、横型のⅠ・Ⅱ類は西北九州における石匙の初現とみなされる深原遺跡において概に揃っており、縦型のⅠ類も見られる。深原遺跡と同様に初現の遺跡として問題にした岩下洞穴でも横型のⅠ・Ⅱ類、縦型Ⅰ・Ⅱ類と判断できるものが出土している。これらの遺跡による限り、西北九州においては当初から石匙の基本的なタイプがほぼ揃っていたことになり、西北九州以外の地域において概に完成された状況で石匙が入ってきたものと考えられよう。それと共に石匙と全く同様な形態でつまみのみが形成されていないスクレイパーが、石匙出現以前に存在しているだけに石匙のつまみの出現は重要視される。

石匙の用途

横型・縦型の石匙を刃部と交わる部分の形によって、それぞれⅠ・Ⅱ類に区分を試みた。石匙のⅠ類とⅡ類の機能および用途上の差異については必ずしも明確にし得ないのであるが、直線的な刃部とそれに接する鋭角な尖った刃先きをもつⅠ類は、対象物を切るという働きよりも、むしろ切り裂く、切り開くという作業を主目的とした石器とみなされるべきであろう。これに対して鋭い切っ先を有しないⅡ類は切ることや削る・剥ぐなどに主たる目的が想定される石器である。石匙の製作技術の上でも、Ⅰ類は精巧に作られたものが多く、一方、Ⅱ類はⅠ類に比較して粗雑な作りのものが目立つのである。また石匙の数の面で、Ⅱ類は他のものに比べて出土例が少なくないという傾向が窺え、これはこの石匙の主たる用途と関連するものとみなされる。すなわち、切ることを一番の目的とすれば、必ずしも石匙のような定型化した形態をとらなくても、鋭利な剥片やスクレイパー、それに不定形な二次加工のある剥片で十分用が足りると考えられるからである。残されたⅡ類については外彎する刃部と

その両端の尖頭状の刃先きをもつその形態から、Ⅰ類・Ⅲ類のように、よりふさわしい機能を推測することが困難であるが、恐らくⅠ・Ⅲ類の両方の機能を兼そなえたものであろう。たしかに、西北九州の地域にあっては横型のⅡ類として分類される石匙が最も多く、普遍的な存在であることはこの事を暗示しているとみなされよう。製作面からも精巧なものが顕著である。この様に考えると石匙の用途の上では、むしろⅠ類とⅢ類がより特殊な目的があった石器と判断されそうである。

結局、Ⅰ類の石匙は獲物のとどめや大まかな解体を想定し、Ⅲ類はその後の処理の段階において使用されたものと考え、さらにⅡ類についてはその両方の作業で主として用いられた石器として把握しておきたい。もちろん石匙の用途の対象として、木・骨あるいは皮なども推定され、その加工具としても大いに役立つたであろう。

西北九州における左記の二遺跡は石匙の用途を考察する上で、きわめて重要な示唆を与えている。

つぐめのはな遺跡

九州本土の西北端、平戸瀬戸に面する当遺跡は昭和四六年、長崎県文化課による調査が

実施され、縄文時代前・中期の豊富な遺物が出土している。また発掘調査の前後においても、土地の所有者をはじめ地元の人々によって発掘品を上まわる石器類が数多く採集されており、この遺跡の規模をおし測ることができさる。

当遺跡出土資料の中で、特に顕著なものとして各種の石銛があり、その出土数は一五〇点を越える。同時に石匙・スクレイパーなども多く、石匙は発掘調査で二〇余点出土しており、表採ではそれをしのいでいる。地元の採集資料を一堂に集めれば恐らく五〇点をはるかに上まる数となろう。これらの石匙の大半は横型で占られており、先に分類したⅠ・Ⅲ類が認められる。スクレイパーも石匙と同様にその数は多く、比較的大形のものゝ

著である。形態はバリエーションに富んでいるが、大別すると直線的な刃部で鋭利な先端をもつものと、刃部が弧状に外反したものとに分類することが可能である。

つぐめのはな遺跡において多量に出土している自然遺物は石器組成の主体を占める石銛・石匙・スクレイパーなどの用途を考察する上で特に重要な資料といえる。すなわち、自然遺物では、クジラ、イルカ類などの海棲哺乳類や大形の魚類であるサメ類などの骨が出土しており、表採でも同様な骨やサメ歯が認められるのである。石銛はこれらの捕獲において主要な役目をはたしたであろうし、捕獲された獲物は石匙やスクレイパーなどで解体処理されたことは想像に難くないのである。

つぐめのはな遺跡が立地する平戸地方は明治の頃まで捕鯨が盛んな地域であったという環境や遺跡出土の自然遺物は、これらの石器の用途を如実に物語る好例とされよう。

沖ノ島先史時代遺跡

当遺跡もつぐめのはな遺跡と同様に、石匙の用途を検討する上で貴重な存在とされる。

玄海難に浮かぶ孤島沖の島は古代の祭祀遺跡として著名であり、祭祀に関連する豊富な遺物は「海の正倉院」と称され親しまれている。この沖の島では、海岸近くの社務所前と祭祀遺跡と重複する岩陰の二ヶ所において縄文時代の遺跡が確認されている。沖ノ島は絶海の孤島で、しかも古代から神の島として信仰の対象になっていることもあって、ほとんど人手の加わっていない自然が残されている。また沖ノ島周辺はブリ・タイ・シイラ・イカなどの好漁場となっており、まさに海の幸に恵まれた環境である。

沖ノ島の社務所前遺跡と洞穴遺跡は共に縄文時代前・中期を主体としたものであり、石鏃・石銛・石匙・スクレイパーなどが出土しており、それらの石器は遺跡の立地および環境から海に関連の深いものとして把握される。

またこの島にはシカ・イノシシなど哺乳類が生息していないということもつけ加えておく必要がある。実際、沖ノ島の二遺跡から出土している自然遺物はニホンアシカの骨を筆頭に、サメ・ベラ・マダイ・ブリ・フグなどの魚類、岩礁性の貝類、それに少量の鳥類の骨であり、やはりシカ・イノシシなどの獣骨類は皆無の状態である。⁴⁸以上のことは、沖ノ島の先史時代遺跡出土のⅠ～Ⅲ類の石匙およびスクレイパーの用途が海棲哺乳類のアシカをはじめ、大形魚類などの解体処理を容易に考えることができよう。

つぐめのはな遺跡および沖ノ島先史時代遺跡の状況から石匙の対象となるある種の獲物についての推定が可能と考えられる。しかも鋭い先端部を有するものとそうでないものが存在していることは、やはり石匙の形態の違いによる使いわけがあったことを示唆しているのである。

以上、石匙の用途について形態および出土状況から予測したのであるが、今後、これらについては使用痕の観察から使用法・対象物など微視的な研究の必要性を痛感するのである。

一方、石匙の形態から推測される用途と同様なことが考えられる石器にスクレイパーがある。スクレイパーはそれぞれ、縄文時代のほとんどの遺跡において認められる石器であり、しかも量的にも多い。形態のバリエーションに富んでいるスクレイパーも、先に触れたように刃部の形態によって石匙と同様に大別することが可能である。直線的な刃部と共に一端に鋭利な三角形の刃先きを有するものと、一端あるいは両端に尖頭状の刃先きをもつものが存在する。すなわち、石匙のⅠ・Ⅱ類に相当する形態を有しているのである。この他、外彎する刃部に接する両端が大きな孤状を呈するものもみられる。恐らくスクレイパーにおいても、形態の違いによってその目的が異なっていたのであろうが、いずれにしても、獲物の解体処理や工具として使用されたものと考えて大過

ないであろう。

石匙と同じような機能が推定されるスクレイパーが多く認められながら、一方ではつまみのある石匙が存在するのはいかなる要因によるものであろうか。石匙のつまみについて若干考えてみたい。

石匙のつまみ

石匙は一端につまみをもつという形態上の特長から古くから人々の注目にはのぼっているのであるが、その機能については普通言われているように吊すための紐かけであろう。たしかに東北地方出土の石匙の中には、つまみの部分にアスファルトなどの膠着剤が付着する例がある。それで木製あるいは骨製の柄との着装が推測されるであろうが、紐を付けた上にさらに固定を強くする目的で膠着剤を用いることも考えられてよいであろう。また石匙の多くに見られる小さなつまみが柄との着装にいかなる効果を發揮したかも疑問である。いずれにしても石匙のつまみの主たる目的はやはり吊すためのものとみなされよう。

紐を掛けるということは常時あるいは一定の作業中身につけておくという必要性に起因するもので、使用頻度が高きわめて高かったことを示唆するのである。一定の目的での作業過程でひんぱんに使用されるため、腕あるいは首、腰に紐の一端を固定させておく仮定すれば、その作業はたびたび両手を自由に使える必要性が要求され、その結果吊しておくという状況が考え出されたものであろう。すなわち、片方の手は石器と対象物を交互にあつかうことが多いため、より身近な所に石器を置いておくことになる。さらに石匙の大部分が左右対称な形態にあえて製作されていることは、たびたびもちかえることを余儀なくされたための工夫のあらわれとみなすことはで

きないであろうか。握り方の如何を問わずどちらの端にも三角形あるいは木葉形の刃先きをもたせておくということに關連するものと考えられよう。

以上のような作業が縄文時代において予想されるものとして、先に述べたように獸類や海棲哺乳類、それに大形魚類などの解体作業を挙げることができる。このことについては、遺跡の環境や立地、石器組成、それに自然遺物などを含めた多角的な視野からの検討の積み重ねが必要であることは論をまたない。

石匙による共同体構成の問題

石匙のつまみについては前に述べたようにある作業の過程で、より身近においておくという、すなわち、携帯するという働きがよみとれるのである。

石匙と同様な形態を有し、しかも同じ用途が推定される石器であるスクレイパーが一方で存在しながら、片方では携帯を意図する石匙が存在しているのである。

つまみをもつ石匙の出現は、どういう形かは別にしても、ある種の所持の形態を示唆するものである。それが私的な個人所有としてか、あるいは共同体での特定の作業期間にだけ保有されたのかというこの所持の形は、共同体の構成を考える上で重要な要素を内在しているものと言える。石匙がいずれの所持のされ方をしていたかについての判断をただちに下し得ないのであるが、ある種の分業のあらわれとして把握することができるであろう。⁵⁰ 先史時代において、石匙が出現する以前から性的分業や年齢階層などの自然発生的な分業が存在していたであろうが、石匙の出現は縄文時代の分業や共同体の構成のあり方を端的に示す一つの資料となり得るであろう。

西北九州においては縄文時代早期後葉にはじめて、携帯を示唆する石器である石匙が出現している。しかも石匙の初現時から概に石匙の基本的なタイプが揃っており、この形態の違いから機能の分化が予想でき、このことは、生産活動のある面での組織化、体系化のあらわれとも受けとられよう。

しかしながら一面では一遺跡での石匙の出土数がきわめて限られていることや、石匙を出土していない遺跡がかなりの数のぼることはいかなる状況を示すものであろうか。たとえば福岡県遠賀郡に所在する榎坂遺跡⁵¹は後期を主体とする遺跡で、北九州の貝塚としては稀にみる豊富な遺物が出土している。石器では石斧・石鏃・スクレイパーなどが認められながら、石匙は一点も出土していないのである。近接する山鹿貝塚でも一〇〇点近い石器が出土しているが、石匙は表採資料中にわずか二点のみである。しかも当貝塚ではイルカ・サメ類など石匙の対象が想定できる自然遺物が発見されているだけに、その数はあまりにも少ないと言えよう。

糸島半島の突端近くに位置する天神山貝塚⁵²でも、クジラ・エイなどの骨が出土しているが、石器組成中に石匙を見出し得ないのである。これと同様に海岸に立地し、各種の石器が出土しているにもかかわらず、その中に石匙がみられない遺跡として、五島の宮下貝塚⁵³・江湖貝塚⁵⁴などをあげることができる。

また、福岡県柏田遺跡では石鏃・石斧・スクレイパー・刃器など一〇〇〇点にものぼる石器が出土しているが、石匙は横型のものがわずかに三点という例もみられるのである。

さらに石匙と同様な用途をはたしたとみられる多くのスクレイパーの存在などは、石器組成の中で石匙がかなり特殊な石器であるという一面を窺わせるのである。それに石匙などを用いてのシカ・イノシシなど中形の哺乳類やイルカ・アシカなど海棲哺乳の解体は特殊な作業を推測させるものである。これらの作業は共同体内部のあ

る特定の人々があたり、石匙はその作業に従時する際に所持されたものであろう。

以上のようなことから、結局、石匙は個人的所有の石器とはみなし難く、共同体内で保有され、生産活動のある過程で共同体の構成員たるある特定の人によって所有され使用されたものと考えておきたい。この場合、その特定の人たちが生産活動のなかでどのような立場にあるのか。いいかえれば、共同体を構成している人々の意識がどのように反映された結果、所持するという形が生まれてくるかという、共同体の構成の重要な問題提起がなされる。

西北九州において石匙が出現する縄文時代早期後葉は何らかの形で、以前とは異なる生産活動が開始されたということであろうか。

この時期における土器群の大まかな状況としては、貝殻条痕文土器群が顕著な傾向をみせはじめる。⁵⁵今のところ西北九州においてこの土器群と石匙の関連については明確に把握されていないが、その可能性は残されているといえよう。⁵⁶一方、確実な共伴例がみられる押型文土器群では、従来の文様に比較するとやや粗大になり、しかも器形の上でそれまでの尖底から平底への移行のきざしが看取されるのである。⁵⁷またこの時期とさほど違わない時期に、特徴的な器形を有する塞ノ神式土器も西北九州にあらわれるとみてよいであろう。⁵⁸いずれにしても土器の面でも変化のきざしが窺え、それ以後に何らかの形で影響を与える要素を見出し得るのである。

石匙の出現と全く呼応すると現時点では結論を下せないであろうが、西北九州で特徴的に出土している黒曜石製の縦長剝片およびその剝離技術、それに石銛と判断される漁撈具の出現との関連も無視できないであろう。この二つの石器類の初現については今のところ前期の比較的早い時期が考えられ、石匙が西北九州において普遍化

の現象をみせはじめる時期とほぼ一致するとみなされるのである。

いずれにせよ、石匙の出現およびそれから派生するであろう共同体の構成をはじめとする数々の問題については、西北九州という限られた地域においてのみ論じられることでないのは無論のこと、遺跡における石器組成や土器、自然遺物、それに立地などを含めた上での検討、分析が必要とされるであろう。

石匙と石鏃・石斧

石匙は石斧・石鏃と共に縄文文化の主要な生産の器具で、縄文時代の生活を象徴するものとして把握されている。⁵⁹ 確かに石斧・石鏃・石匙は縄文時代の普遍的な石器として挙げることができようが、縄文時代での出現の時期や縄文文化の生活の上での位置づけについては一様に論じられない面を持っていることも事実であろう。石鏃については、帝釈峡馬渡岩陰遺跡⁶⁰の第Ⅳ層で尖頭器と共伴しているのをはじめとして、石鏃の出現に関しては有舌尖頭器と深い関連が求められる。一方では最古の土器群である爪形文土器や細隆起線文土器との共伴例が知られており、⁶¹ また鹿児島県加栗山遺跡では細石刃・細石核との共伴が報じられている。⁶² 石鏃の存在即弓矢の出現を意味することについては今さら今う必要がないであろうが、それは狩猟活動における一大変革をもたらすものであり、石鏃の出現をもって一つの劃期とするという考え方がされることからその重要性が理解されよう。

石斧についても石鏃と同様、重要な問題を内在している。すなわち石器製作における磨製技術の、出現普及である。それに大きく関連が予想される石器として、本州の旧石器時代終末から縄文時代の初頭にかけて認められる片刃石斧⁶³（丸のみ形石斧）や、関東地方の縄文時代早期前半の燃糸文土器群に伴う局部磨製の礫器⁶⁴などの存在が

想起されよう。石斧は柄の着装によって、「縦斧」と「横斧」とに大別され、それぞれ細部での使用法が異なるであろうが、主たる対象は樹木にむけられ、その伐採から処理にいたる過程での用途が考えられる。縄文時代の主要な生産活動である狩猟と直接結びついている石鏃とは趣きを異にする石器と見なされよう。

一方、石匙についてはこれまで述べてきたようにその一般的な形態から推測される用途として、獣類などの解体、処理や他の道具を作るための工具、すなわち切る、切り裂く、削る、引掻くなどの機能が予想される。石鏃が直接的な生産道具として位置づけられるのに対し、石匙はより副次的な石器とされる。その出現の時期についても、石鏃のように縄文時代の開始の時期にまでさかのぼることは考えられないのである。また縄文時代の遺跡において出土する石匙の数はきわめて限られており、しかも石匙を出土していない遺跡がかなりの数存在するなどの特殊な一面をもち、これらはどのように考えてよいのかも全く不明である。

石匙は縄文時代の特徴的な石器であるだけに、石鏃、石斧と共により正確な資料にもとづく検討の上になつての位置づけが早急になされなければならないと言えよう。

- 1 橘昌信 「縦長剝片―西北九州における縄文時代の石器研究(一)」 史学論叢 九(一九七三)
- 2 橘昌信 「石錫―西北九州における縄文時代の石器研究(二)」 史学論叢 十(一九七四)
- 3 中谷治宇二郎 「石器に対する二三の考察」 人類学雑誌 四〇―四(一九二四)
- 4 吉田格 「日常生活用具」 縄文時代 Ⅱ (一九六五)
- 甲野勇 「生活用具」 日本考古学講座 3 (一九五六)
- 5 佐賀県立博物館 「九州の原始文様」 展示図録 (一九五七) より抽出
- 6 佐賀市教育委員会 「大門遺跡」 佐賀県文化財調査報告書 九 (一九七三)
- 7 福岡県教育委員会 「深原遺跡」 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 八 (一九七八)
- 8 麻生優 「岩下洞穴の発掘記録」 (一九六八)
- 9 7と同じ
- 10 賀川光夫 「縄文文化の発展と地域性―九州東南部―」 日本の考古学 Ⅱ (一九六五)
- 橘昌信 「九州の押型文土器について―編年と分布―」 史学論叢 四 (一九六九)
- 11 八幡一郎・賀川光夫 「早水台」 大分県文化財調査報告 三 (一九五二)
- 12 賀川光夫・橘昌信他 「稻荷山遺跡緊急発掘調査報告」 大分県文化財調査報告 一二 (一九七〇)
- 13 岩尾松美・酒匂義明 「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」 大分県地方史 三四 (一九六四)
- 14 賀川光夫・羽田野一郎 「大分県大野郡朝地町田村遺跡調査報告」 (一九六〇)

- 15 清水宗昭 「政所馬渡遺跡」 日本考古学年報 二九 (一九七八)
- 16 橘昌信 「二日市洞穴の調査」 九重町文化財調査報告一 (一九七七)
- 17 鎌木義昌・芹沢長介 「長崎県福井岩陰」 考古学集刊 三一 (一九六五)
- 麻生優・白石浩之 「泉福寺洞穴の第六次調査」 考古学ジャーナル 一一六 (一九七五)
- 18 志佐惲彦 「竜王縄文文化遺跡調査概報」 教育佐賀 十二 (一九五八)
- 19 松尾禎作 「佐賀県唐津市西唐津海底遺跡」 日本考古学年報 四 (一九五一)
- 20 佐賀県教育委員会 「金剛島遺跡・源平岩洞穴遺跡発掘調査概報」 (一九七三)
- 21 潮見浩 「嘉穂地方の縄文遺跡・遺物」 嘉穂地方史―先史篇― (一九七三)
- 22 片岡肇 「長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査」 平安博物館研究紀要 六 (一九七六)
- 23 橘昌信 「縄文時代の石器」 宗像沖ノ島 (一九七九)
- 23 b 渡辺正気 「沖ノ島の先史・原史遺跡、生活遺物」 沖ノ島 (一九五八)
- 24 松本雅明・富樫卯三郎 「竊式土器の編年」 考古学雑誌 四七―三 (一九六一)
- 25 正林謙・馬場哲平 「つぐめのはな遺跡の概要」 長崎県考古学会会報 二 (一九七四)
- 26 朝倉郡夜須町教育委員会 「金山遺跡」 城山遺跡郡発掘調査報告書 (一九七三)
- 27 佐賀県教育委員会 「西有田町縄文遺跡」 佐賀県文化財調査報告書 一八 (一九六九)
- 28 永井昌文・他 「山鹿貝塚」 山鹿貝塚調査団 (一九七三)
- 29 浜田耕作・小牧実繁・島田貞彦 「肥前国有喜貝塚発掘報告」 人類学雑誌 四十一―一 (一九二五)

- 30 佐賀県立博物館 「白蛇山岩陰遺跡」 佐賀県立博物館調査研究集 一 (一九七四)
- 31 古田正隆 「筏遺跡」 百人委員会埋蔵文化財報告 四 (一九七四)
- 32 佐賀県教育委員会 「大門西遺跡」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 (一九七九)
- 33 田中幸夫 「北九州の縄文土器」 考古学雑誌 二六―七 (一九三六)
- 34 福岡市教育委員会 「四箇周辺遺跡調査報告書―J―10i地点―」 福岡市埋蔵文化財調査報告書 四七 (一九七八)
- 35 潮見浩 「北古賀遺跡」 嘉穂地方史―先史篇 (一九七三)
- 36 福岡県教育委員会 「大道端遺跡」 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告 XI (一九七七)
- 37 福岡県教育委員会 「春日市柏田遺跡の調査」 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 四 (一九七七)
- 38 33に同じ
- 39 賀川光夫・内藤芳篤他 「深堀遺跡」 人類学・考古学研究報告 一 (一九六七)
- 40 古田正隆 「重要遺跡の発見から崩壊までの記録」 百人委員会埋蔵文化財報告 三 (一九七四)
- 41 佐賀県立博物館「古代のうつわ展」の展示資料中に存在
- 42 福岡県教育委員会 「野黒坂遺跡」 福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告 一 (一九七〇)
- 43 福岡県教育委員会 「門田遺跡・門田地区の調査」 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 三 (一九七七)
- 44 福岡県教育委員会 「門田遺跡・辻田地区の調査」 山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 七 (一九七八)
- 45 小郡町教育委員会 「津古内畑遺跡」 福岡県三井郡小郡町津古所在遺跡発掘調査概要 (一九七〇)
- 福岡県教育委員会 「北牟田遺跡」 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 XXXI (一九七九)

- 46 福岡市教育委員会 「板付遺跡 G-6a 地点」板付周辺遺跡調査報告書 四 (一九七七)
- 47 長崎県教育委員会 「五島遺跡調査報告 ー三井楽貝塚 ー」長崎県文化財調査報告 二 (一九六五)
- 48 金子浩昌 「沖ノ島縄文遺跡出土の動物遺存体」宗像沖ノ島 ー本文 ー (一九七九)
- 49 海樓哺乳類および大形魚類の解体処理の石器として、定型的なスクレイパーが存在することに注目し、「鎌崎型スクレイパー」を提唱している。横山順・田中良之 「彦岐・鎌崎海岸遺跡について」九州考古学 五四 (一九七九)
- 50 上野佳也 「有柄石ヒ試論」考古学研究 八一二 (一九六一)
- 林謙作 「有柄石ヒ試論批判」考古学研究 九一三 (一九六二)
- 51 小田富士雄 「榎坂遺跡」日本考古学年報 二四 (一九七二)
- 52 前川威洋・木村幾太郎 「天神山貝塚」志摩町文化財調査報告書 一 (一九七四)
- 53 賀川光夫 「宮下遺跡調査報告・解説篇」長崎県文化財調査報告 九 (一九七一)
- 54 坂田邦洋 「曾畑式土器に関する研究 ー江湖貝塚 ー」 (一九七三)
- 55 西北九州においてはまだ充分に把握されるまでには至っていないが、熊本県轟貝塚の最下層から表裏にハイガイによる条痕を施した土器が出土しており、器形は尖底 ー丸底の深鉢形を呈する。時期については早期後葉が推定され、この条痕文はそれ以後の土器に顕著に認められる。註 4 a に同じ。
- 56 熊本県轟貝塚の最下層出土の表裏に貝殻条痕が施された土器に、横型とも縦型とも判断に苦慮する粗雑な石匙が一点共伴している。またその上層の条痕文のある土器に、精巧な作りの横型石匙が出土している。
- 57 「田村式」の押型文土器は尖底を基本とし、それ以後に位置づけられる「ヤトコロ式」や「出水下層式」は平底となり、

この尖底から平底への移行期が縄文時代の早期後葉から前期初頭と考えられる。註10と同じ。

- 58 「塞ノ神式土器」は西北九州において顕著な存在ではないが、九州本土の西北端に位置するつぐめのはな遺跡において出土している。この土器の編年的位置づけについては、早期と前期との二つの説があるようである。最近の南九州における調査では、「赤ホヤ(Ah)」の下層から出土し、いわゆる轟B式・曾畑式土器に先行していることから早期後葉とみられる。

- 59 賀川光夫 「後期旧石器文化から縄文文化への移行」 別府大学文学部史学科研究論叢 一 (一九七六)

- 60 潮見浩 「帝釈馬渡岩陰遺跡の調査(第一・二次)」 帝釈峽遺跡群の調査研究 一 (一九六四)

- 61 鈴木保彦 「本州地方を中心とした先石器終末から縄文草創期における石器群の様相」 物質文化 二三 (一九七四)

- 62 鹿兒島県文化課の調査結果による

- 63 加藤晋平 「片刃石斧の出現時期」 物質文化 一一 (一九六八)

- 64 杉原荘介・芹沢長介 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」 明治大学文学部研究報告 考古学 二 (一九五七)

- 65 佐原真 「石斧論―横斧から縦斧へ―」 考古論叢 (一九七七)

- 66 福岡県教育委員会 「湯納遺跡の調査」 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 四 (一九七六)

- 67 横尾義明 「久留米市日渡出土の縄文式土器」 久留米市郷土研究会誌 五 (一九七六)

- 68 西健一郎・他 「荒田比貝塚」 大牟田市教育委員会 (一九七〇)

- 69 佐賀県教育委員会 「源平岩洞穴遺跡発掘調査概報」 佐賀県文化財調査報告書 二三 (一九七三)

- 70 橘昌信 「権現原遺跡」 鬼鼻山 二 (一九七〇)
- 71 鹿島市教育委員会 「儀助平洞穴」 (一九七三)
- 72 アルバート・モア 吉崎昌一氏による発掘調査が実施されている。
- 73 麻生優 「下本山岩陰」 佐世保市教育委員会 (一九七二)
- 74 坂本経堯 「古閑原貝塚調査抄報」 熊本県文化財調査報告書 六 (一九五二)
- 75 下川達弥 「天神洞穴遺跡」 日本考古学年報 二五 (一九七四)

図の引用

第一図 一・三・四・八は註7より。二・七・九は註8より。一〇は註二三bより作図。